

としょかん

いわて

岩手県立図書館報

《特集》

つながる ～本にまつわる様々な取り組み～

- レファレンスコーナー
- 児童コーナー わかば通信
- 岩手県内図書館紹介
- 図書館掲示板

2018.11

No.183

contents

目次

ページ

01

特集

つながる ～本にまつわる様々な取り組み～

- ・インタビュー記事「MORIOKA BOOK CAMP について」
- ・地域にともす本のあかり（立ち読み処ちやこ）
- ・「フキデチョウ文庫」の取り組み（しあわせ計画舎）
- ・浜藤古本市について（もりおか町家物語館）

10

レファレンスコーナー

- ・稚児行列に参列する子どもの化粧について、額の点の意味や由来を知りたい。

11

児童コーナー

- ・わかば通信
やってみよう！ミニ・ビブリオバトル

12

岩手県内図書館紹介

- ・大槌町立図書館

13

図書館掲示板

- ・猫ノ図書館 ねこ館長むぎの出勤レポート
- ・編集後記



特集：つながる

～本にまつわる様々な取り組み～

各地の公共図書館ではBMの運行や外部団体との連携を通じ、本を介したコミュニケーションの場の提供に努めているところも多いかと思います。近年は、誰もが気軽にアクセスできる場所であるという特長を活かし、自宅でも職場や学校でもない“サード・プレイス”としての図書館を志向する向きもあります。

一方、公共図書館以外でも、本と人とを結ぶ「居場所づくり」の活動をされている方々がおります。個人であったり団体であったりと活動単位は様々ですが、それぞれどのような思いや願いから活動を始めたのでしょうか？ お話を伺うと、共通しているのは「本が好き」「人が好き」という気持ち、また、その地域にあった場を作り上げ、持続させていこうという思いではないかと感じました。

今回はそれらのごく一部ではありますが、本を媒介にして地域コミュニティの創生に尽力されている方々をご紹介します。

MORIOKA BOOK CAMP



2018.9.15.sat
@MORIOKA CENTRAL PARK

<インタビュー記事> MORIOKA BOOK CAMP について

去る9月15日(土)、岩手県立美術館そばの盛岡市中央公園で「MORIOKA BOOK CAMP」が開催されました。県内ではめずらしい屋外開催のブックイベントで、キャンプの名称が示すとおり、組数限定ではありますが公園内での宿泊もありました。当日は県内外から書店、雑貨店、飲食店が出店し、昼にはトークイベント、夜にはBook Barが開催されるなど、子どもから大人まで終日楽しめる内容で、多くの方が屋外で本を媒介とした交流を楽しんでいたようです。

このユニークなイベントは、いったいどのようにして着想されたのでしょうか？ 発起人である「BOOKNERD」(ブックナード) 店主の早坂大輔さんにインタビューしてみました！

このイベントを開催するにあたって“きっかけ”のようなものはあったのでしょうか？

ALPS BOOK CAMP(※1)に参加したことが一番のきっかけではありますが、それよりも前から、“こういうことができればいいな”というのがあったんです。さかのぼると、今回一緒にブックキャンプを企画したメンバーなんかと話をしていた時に、今という時代や、今どきの子どもたちのことについて話す機会が割とありまして、一日の中で書籍を読むことが少なくなっている、という話を聞いていました。

自分自身もそうなのですが、スマートフォンとかタブレットとか、デジタル機器に触れる機会の方がずっと多くなっている。それは時代の流れで仕方のないことなのだけれど、もっと紙の温もりというか、感触とか言葉とか、直接本を手にとって読んでみる面白さとか、そういうものを伝えられる場があればいいよね、と。そういう体験を閉じられた空間ではなく、むしろ自然の中で体験できる機会を作れないだろうかと話していたんです。そんな時に、たまたまALPS BOOK CAMP というのがあることを知って、そうしたら偶然にも知り合いから出てみませんかと声をかけていただいたんです。それが土台となりました。

県が行っている読書調査でも、中高生になると読書冊数はグッと減ります。昨年度の大学生協の調査(※2)では、1日の読書時間ゼロが5割を超えたとの結果も出ていましたね。

本屋をやっているからということもありますが、10年後、今の子どもたちが自由に本を買えるようになった時、果たしてどうなっているのだろうと考えるんです。本を手にとってくれるだろうかという、現状、悲観的にならざるを得ない。もっと大げさに表現するなら、盛岡とか岩手の文化的なことを考えた時に、このままでいいのだろうか、という危惧がありました。

この店の購買層の中心は30代~40代、年配の方も多く60代~70代の方も来店されます。高校生はほとんど来ることはないし、大学生も意外に来ません。

このイベントは、主に子どもやその親をターゲットとして考えていたのでしょうか？

そういう訳でもありません。自然の中で言葉や本に触れ、親しんでもらう、というのがメインテーマなので、大人であってもいいんです。もちろん、子どもというか、未来の大人たちに言葉や本に親しむ体験をしてもらいたいというのが一番の狙いではありましたが。



なるほど。Book Barなど大人向けのイベントも実施されていましたね。

以前、紫波町図書館の手塚さんからお誘いをいただき、Book Bar(※3)にバーテンダーとして参加したことがあります。その時にこれは面白いなと思ったんです。ひとが選んだ本の話聞くのも、紹介された本を読むのも面白い。何かしら自分の読書の参考になると思います。今回BOOK CAMPのコンテンツを考えていく中で、Book Barを夜にやったら面白いだろうなあ、しかも焚火の中でやったらなお面白いだろうなあ。だから、元をたどれば紫波町図書館さんで開催されたイベントです。

トークイベントでは「NUMA BOOKS」の内沼晋太郎さんとトークをさせていただきました

た。内沼さんはブックディレクションをされたり執筆活動をされたりと本にまつわる様々な活動をされており、今年5月に『これからの本屋読本』(※4)という本を出版されています。この本にまつわるお話をメインに、これからの本屋はどうあるべきとか、街における本屋の役割とか、そういったお話をさせていただきました。

ちなみに、早坂さんが考える“本屋のあるべき姿”は、どのようなものなのでしょう？

声高に何かを押し付けるのではなく、何か心の中にモヤモヤしたものがあつた時に来て、何かを見つけて、買って読んでもらうことで解消できたら良いなど。そういう存在であつたら良いなと思っています。

それから、本屋は多種多様な方々が集まってくる場所でもあります。もちろん、営利行為をしている場所ではあるんですが、人と人が集まり、つながり、何か生まれる。そういう街を発展させていく有機的なつながりを生み出す“ハブ”のような存在になれたらと思います。

このお店では、絵の展示をしたりトークイベントを開催したりしています。著者の方を呼んで皆さんと話をしてもらい、その方の人となりを知ってもらって本を買ってもらうとか。小さな部分ではそういったこともやっています。

先日は工藤玲音(くどう れいん)という歌人の本を出版させていただき、その出版記念トークイベントを開催させていただきました。彼女は自費出版をしていたのですが、すごく良い本だったので、それをうちでデザインと装幀をさせていただいたんです。近々では、盛岡在住の福土陽香(ふくし はるか)というイラストレーターの作品をジン(※5)という形態で制作・販売予定があります。

本屋さん発の本とは面白いですね。話を戻し

て、MORIOKA BOOK CAMP の反響はいかがでしたか？ また、今後の展望はどのようにお考えでしょうか？

SNS では本当に楽しかったとか、すごく良かったとか、好意的な声が非常に多く寄せられました。来店されるお客様からも面白かったよと声をかけていただいています。

今は振り返りをしているところで、今回はこうしてみようかという話をしているところです。今回は初回ということもあり、出店は 24 店舗と、当初考えていたよりは少なかったです。将来的にはもっと出店者を増やしていきたいですし、BOOK CAMP と名乗るくらいですから、やはりまずは本屋さんの出店を増やしたいと考えています。加えて、ALPS BOOK CAMP では夜に映画上映をしたりアーティストのライブがあったりと、コンテンツに様々な工夫が凝らされています。そういったところも参考にしつつ、コンテンツの中身も厚くしていきたいと考えています。



モリオカの、まんなかで。
読んで、聴いて、感じる時間。
いつもの場所が、とびきりの場所に。

高く澄み渡る空の下、色づき始める木々。
季節の彩り豊かな場所、盛岡市中央公園に
県内外のブックストアが集います。
本のために選曲された音楽を聴き、珈琲片手に
ページをめくる。
美味しいご飯でお腹を満たして、お気に入りの
雑貨をみつけましょう。

2018年9月15日(土)

11:00-21:00

10組の宿泊客は翌日9月16日(日)午前解散

会場：盛岡市中央公園
(盛岡市本宮字蛇屋敷外)
*入場無料

協力

snow peak URBAN OUTDOOR Shop in Shop OGAL
BOOKNERD
blink.blue.photography
株式会社ハウス M21

*緑に囲まれた場所で湖からそよ風を顔に受け、
一冊の本を開く。美味しいパンやコーヒー、芳醇
な音楽や素敵な雑貨だてここにはある。
長野県大町市の水崎湖畔で毎年7月に開催されて
いるブックイベント「ALPS BOOK CAMP」。この
イベントに着想を得たイベントが「MORIOKA
BOOK CAMP」です。

出店 (順不同)

BOOKS

- ・BOOKNERD
- ・pono books&time
- ・さわや書店
- ・まちの編集室
- ・都文堂書店
- ・ペンギン文庫
- ・Books&Café コトウ
- ・H.A.Bookstore
- ・乃帆書房

FOOD & DRINK

- ・FOG COFFEE
- ・SENDAI COFFEE STAND
- ・のら珈琲
- ・café&living UCHIDA
- ・桜食堂
- ・ドゥミセックドゥエム
- ・ホーリーパン

GOODS

- ・snow peak
- ・URBAN OUTDOOR Shop in Shop OGAL
- ・6jumbopins
- ・FEM TRE NOLL
- ・FUCHI

OTHERS

- ・blink.blue.photography
- ・選曲 DJ HIROO

【絵本読み聞かせ】
岩手県立図書館

2回目も期待してよいでしょうか？

頑張りたいと思います (笑)

インタビュアー：安和徳・安倍和恵 [岩手県立図書館]

※1：長野県大町市で 2014 年から開催されているブックイベント。全国各地から個性的な書店やリトルプレスを集めたブックマーケットを中心に、野外イベントの開催、雑貨店や飲食店の出店など、自然の中で本をキーにして楽しむイベントとなっている。

<https://alpsbookcamp.jp/>

※2：「第 53 回 学生生活実態調査の概要報告」

<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

※3：「オガール祭り」の開催に合わせ、2018 年 8 月 4 日に紫波町図書館にて実施されたイベント。

<http://ogal-shiwa.com/news/2713>

※4：内沼 晋太郎/著 NHK 出版 2018.5

※5：ジン (zine)。Magazine または Fanzine の略称で、個人または少人数のグループで自主的に制作・流通される出版物のこと。

BOOK CAMP 参加レポート

MORIOKA BOOK CAMP は自然の中で本に親しむことを目的に行われたイベントで、当日は県内外の書店、雑貨店、飲食店等 20 店舗以上が出店していました。県立図書館からも職員 3 名が参加、敷物やタープ等を持ち込み、その場で読み聞かせや図書館の利用案内などを行いました。図書館のブースには果たして立ち寄っていただけのだろうか心配していましたが、結果、読み聞かせだけでも約 40 名の方が参加してくれました。中には「図書館ってアイーナの?」「まさか図書館がここに来ているとは思わなかった!」と驚きの声を上げる方も。

本に関するイベントなので、参加者は普段から図書館を使われている方が多いのではないかと考えていましたが、実際のところ図書館利用者はごく少なかったと感じます。ブックイベントに一出店者として関わることで、図書館の認知度を高め、利活用促進にもつなげられるのではないかと感じる機会となりました。

(岩手県立図書館企画広報課 安倍 和恵)

<立ち読み処ちゃこ>

地域にともす本のあかり

「立ち読み処ちゃこ」は岩泉町の西部、盛岡市と隣接する釜津田地区にある地域文庫です。ごく普通の、地域の農家の玄関先のスペースを利用し、設置者の蔵書の一部の展示と貸し出しとともに、町の図書館から定期的に図書を借り受け地域の希望者に貸し出す活動をしています。2016年11月に活動をはじめたので、もうすぐ丸二年の活動となります。[本号発行時点]



「立ち読み処 ちゃこ」は民家の玄関口を開放したスペースです。農作業や生活の合間に長靴で気軽に寄れる場所が理想です。

まず土地柄からご紹介します。盛岡市と隣接する、と書きましたが、当釜津田地区はなかなかの山あいの地です。地域内には景勝地としても知られる櫃取（ひとり）湿原や短角牛の放牧風景がみられる早坂高原などがあり大変自然豊かな地ですが、町の中心部（龍泉洞、役場や町立図書館などがある地域）からは車で50分ほど離れており、“隣接する”盛岡市との道路は冬季間にはすべて通行止めになるという地理的環境にあります。地域には約400人ほどが暮らしていますが、ほとんどの方が自家用の田畑を持ち、短角牛の生産や林業などでのんびりとした生計をたてています。食べるものには苦労はしませんが、その分、商店などもありません（小規模な個人商店が二、三軒

あります）。

本とのふれあいを求める雰囲気は地域内ではあまり感じません。そもそも本とふれあう場所が地域の学校くらいしかないのです。その他は地域へ月に一度やってくる町の移動図書館車が数少ない本とふれあえる場所でした。移動図書館車には個人的にはとても満足しており、毎月やってくるのを今でも楽しみにしています。

そんな地域の中で“本を通じて地域の人と関わりたいなど”思うようになったのはいつごろからだったかはわかりません。のちに「立ち読み処ちゃこ」として一部を利用することになる自宅には普段あまり使われないスペースがあり、時折ご近所同士で集まる事がありました。せっかくなら少し本を置いてみようかな、と思うようになりました。そんな折、長く絵本の読み聞かせ活動をしていた知り合いから絵本を譲りたいという話があり、さらに町の図書館に相談したところ定期的に本を貸し出してくれることになりました。強い使命感のようなものというよりは、いろいろなことのタイミングが重なり「立ち読み処ちゃこ」をはじめることになったと思っています。

「立ち読み処ちゃこ」の特徴は「地域の方はいつでもどうぞ」というスタイルです。先にも書いた通り、本に親しむ雰囲気は地域にはあまりありません。農作業などでみまな忙しいし、さまざまなことはお互いで教えあったり学びあったり笑いあったりするからです。その中で「本がある場所」とし



夏、自転車で立ち寄った子どもたち。子どもの数は小中学校あわせて十数人ほどです。家が遠いと車でしか来られず、冬は自転車も禁止なので近所の子どものみしか来られません。集まれるおはなし会などでできれば。

て地域の中で存在したいと考えたとき、農作業の合間、回覧板の回覧、ちょっとした寄り道のついでにちょっとおしゃべりしていくように「本のある場所」に腰をかけていってもらいたい、と思いました。気軽に立ち寄り、気が向いたら少し背表紙に手を伸ばしてみる、そんなイメージです。そのため、特別な曜日や時間は定めず、いつでものぞけるようにしています。長靴を履いたまま本棚を背におしゃべり——そんな気軽さの中で「本のある場所」が自然と地域のひとたちの頭の中にインプットされていくこと、それが最初のステップのように感じています。



地域の人は家人が留守でも利用できます。利用者がそれほど多くないことのメリットのひとつです。

とはいえ、せっかくの本に実際にふれてもらいたいのも本心です。そのため、図書館からの本が入れ替わるタイミングで図書館本の紹介を兼ねた“おたより”を地域に回覧しています。本業の農業の合間に作成するので本のリストを載せるだけの時もあれば、うんと気合いをいれて企画的に本を紹介することもあります。気になる人はお便りをチェックして借りにきてくれます。

畜産と林業が盛んな地域がら、「牛の本」のコーナーを設置しています。絵本から専門書まで内容や様式は一切問わず、図書館の方に協力をいただきながら「牛」というキーワードでつながる本

を展示しています。同じように「山（や林業、木）の本」と「地域の本」のコーナーもあります。それらはやはり人気です。子どもたちも専門書をめくったりします（遊びですが）。地域のことを本を通じてあらためて見るようで私も面白いです。



回覧板に入れるお便り。図書館本の紹介が中心です。地域の人が見やすいよう大きめの字や絵をいれたいと思っています。

その他、シリーズ本読破のスタンプラリーや、キノコの季節にキノコの本のコーナーを作ってみたりといったことも、時々ですがしています。立ち寄ったときにふとそんな企画にふれてもらい、本とふれあう場所になってくれたらと思います。

町の図書館には大変協力をいただき、いつもさまざまな相談をし、応じていただいています。図書館が遠い環境なので、せっかくある町の図書館と地域を結ぶ役割もできたらと思っています。今はまだ試行錯誤の段階ですが、今後もさまざまなことを学び、考え、地域の中の「本のある場所」となりたいなとささやかな夢を思い描いています。

（「立ち読み処 ちゃこ」 三上亜希子）



図書館に協力していただいて開催したシリーズ本読破のスタンプラリー。女の子ひとりが制覇し、今でも時々その話で盛り上がります。

「立ち読み処 ちゃこ」の活動は、Facebook でご覧いただけます。 <https://www.facebook.com/bookschako/>



〈くしあわせ計画舎〉 「フキデチョウ文庫」の 取り組み

フキデチョウ文庫のような場所が図書館の原点なんです。僕は朝礼で職員全員にフキデチョウ文庫に一度行ってみるようにと話しているんです——盛岡で125回以上続いている読書会「リーラボいわて」(※1)の100回記念の懇親会の席で、岩手県立図書館の前総括責任者Kさんにかけて頂いた言葉です。今年で6年目を迎えた「フキデチョウ文庫」は、盛岡の中ノ橋通り(旧葺手町)にある高齢者と障がい者のデイサービスです。建物のあちこちに本棚がありサービス利用の方以外の方も自由に利用できる施設です。様々な個人・団体が利用しており、年間5,000人から6,000の方が出入りし本の貸し出しも行っていきます。

開所のきっかけになったのは、2012年に開かれた本のイベント「モリブロ」(※2)のクロージングトークで「『本の街もりおか』の可能性を考える」を拝聴したことです。(詳しくは南陀

楼綾繁さんの『ほんほん本の旅あるき』(※3)をご覧ください) その時、司会の南陀楼さんに鋭く突っ込まれていた書店員Kさん、大学教員Gさん、行政職員Fさんと偶然会うことになり、盛岡市の産学官連携の制度をつかいながら2013年に開所にいたりしました。

それまでの自分は医療・介護の仕事に携わりながら“地域と隣り合わせの業種であるのに何となく生活と断絶しているのでは?”と感じていました。当時はその理由をうまく説明することができなかったのですが、「福祉と文庫」を組み合わせた一般的にみれば異質な空間を運営し多くの人や本と出会うことで、それが徐々に分かってきたような気がします。

一例をあげると、2014年に大学教員のGさんに紹介していただいた慶応大学の加藤先生他がおこなっている「カレーキャラバン」(※4)との出会いがあります。コミュニケーションを味わう居心地のよい、あるいは少し居心地の悪い場所のつくりかたを、著書『つながるカレー コミュニケーションを「味わう」場所をつくる』(※5)で教えてくださいました。



2017年2月11日に開催した「カレーキャラバン」の様子。
“帰ってきたら フキデチョウカレー”ができあがりました。

また、『身近な野菜の奇妙な話』(※6)の著者である森昭彦さんは、普段気にもとめず足蹴にし

ている雑草やおかずの付け合わせぐらいにし
か思っていない身近な野菜たちが私たちの体
に及ぼしている影響が未解明という事実を通
じ、私たちが関わっている身近な人たちがいか
に重要な影響を与え合っているかを教えてく
だしました。

お二人の共通点は、「結果や効果にいつも現
れるわけではない、捉えどころのないものの大
切さ」を教えてくださいとところです。



2014年10月5日に開催した「盛岡雑草フェスタ」の様子。
森さんの著書(図鑑)をさわや書店さんが推薦書として販売
したことがきっかけとなり開催が実現しました。

冒頭で出てきた県立図書館の前総括責任者
Kさんとお話をした際、イタリアの図書館司書
アントネッラ・アンニョリさんの『知の広場
図書館と自由』(※7)の話になり、近年の公共空
間の商業化による交流と対話の機会の喪失、公
平・自由・匿名性が担保された“屋根のある広場”
の必要性を再確認させてもらいました。

あれから数年経ちますが、あの時のお褒めの
言葉を糧に、地域の社会資源として本や人の出
会いと対話を大切にする広場でありたいと思
います。

(一般社団法人しあわせ計画舎
代表理事 沼田雅充)

フキデチョウ文庫を含む「しあわせ計画舎」の活動
は、Facebookでご覧いただけます。

<https://www.facebook.com/一般社団法人-しあわせ計画舎-542827479060757/>

※1：読書朝食会 reading-lab =岩手=

<https://ameblo.jp/realab-i/>

※2：2012年5月12日(土)から6月3日(日)にかけて盛
岡市内で開催されたブックイベント。クロージング
トークは6月3日に岩手県公会堂で行われた。

<http://moriburo2012.blog.fc2.com/>

※3：南陀楼 綾繁 // 著 産業編集センター 2015.4

※4：「全国各地のまちへ出かけ、その場所で調達した食材
と、その場所に居合わせた人びとの知恵をまぜあわ
せ、その日、その場かぎりのカレーをつくり、みん
なで食べるプロジェクトです。」(サイト内紹介文より引用)

<http://curry-caravan.net/>

※5：加藤 文俊, 木村 健世, 木村 亜維子 // 著
フィルムアート社 2014.7

※6：森 昭彦 // 著 SBクリエイティブ 2018.3

※7：萱野 有美 // 訳 みすず書房 2011.5



〈もりおか町家物語館〉 浜藤古本市について

浜藤（はまとう）古本市は、もりおか町家物語館が開催した本のフリーマーケットです。古本・自主制作本・本にまつわるものを販売する個人・グループを募集し、浜藤の酒蔵を会場に古本市を開催することで、本を通じた交流の場をつくり、文学の復興と賑わいの創出を図ることを目的としています。



浜藤の酒蔵は明治初期に建てられました。屋内には当時の柱や梁の一部をそのまま残しています。

開催のコンセプト

全国では人口の減少や電子媒体の普及で書籍販売市場の規模は10年連続で縮小していると言われており、現にここ数年でいくつかの雑誌が廃刊や休刊に追い込まれるなど、書籍にとって厳しい状況が続いています。盛岡は書店の店舗数こそ減少したものの、東北の同規模都市に比べてまち全体の書店の総面積が広く、2018年5月には総務省の統計で1世帯あたりの書籍購入額が全国1位となった街です。本に親しむ人が多いこの文学の街盛岡で、本について語り合い、本を通じて人とつながる場をつくるため、2018年3月にもりおか町家物語館の浜藤の酒蔵で浜藤古本市は始まりました。

幼い頃に読んだ本、衝撃的だった本など、本の一冊一冊には人それぞれに出会いや思い出があります。また、本を読むことで、新しい考え方や思いがけない発見などをしたりするきっかけになる事もあります。本との出会いや思い出、本で得た新しい発見が、人と人を繋げるきっかけにもなり、そうした本を通じた様々な思いを共有することが、本好きコミュニティが広がる一つのきっかけへと繋がっていくのではないかと考えております。そしてその共有の場として、浜藤古本市が一つの手段となりたいと思っております。



第1回 浜藤古本市の様子

イベントの組み立て

浜藤古本市では冒頭で紹介したように、古本だけでなく自主制作本や本にまつわるもの（栞、ブックカバー等）も出品対象としました。古本市の概念を少し広く捉え、いろいろな本好きの方が参加しやすいよう工夫しております。また、飲み物や軽食の出店も募集し、いろんなお店を見ていただき、ゆっくりと本に親しんでいただけるような空間作りを目指しております。



個性豊かな本が並び、出店者と言葉を交わす姿も見られました。

参加者の反応

2018年3月24日、25日に初開催した第1回浜藤古本市では、幅広い世代にご来場いただき、購入した本を嬉しそうに持ち帰る姿が印象的でした。「是非また開催してほしい」という嬉しいお声をいただき、4ヵ月後の7月7日、8日に開催した第2回浜藤古本市では、岩手県内外から飲食の出店者を含め17店舗に出店いただきました。当日はあいにくの雨模様でしたが、個性豊かな本が並び、出店者と来場者、時には出店者同士で本を片手に楽しそうに語る姿が見られました。



第2回 浜藤古本市の様子

参加者に行ったアンケートでは、「他の出店者の方とお話しすることで大変刺激を受けた」「岩手県内では古本市の開催が少なく、貴重なイベントなので継続した開催を期待したい」といった声が寄せられました。他にもたくさんのご意見やご要望をいただき、まだまだ改善していく必要があります。浜藤古本市ならではの本を通じた交流の場を、参加者と共に作り上げていきたいと考えております。

今後について

浜藤古本市はまだまだ新しい事業ではありますが、地域に根付く一つのコミュニティ・イベントとなれるよう、1回1回を充実したものにしよう丁寧に組み立てていきたいと考えております。しかし、本が好きな方々へのイベント周知が難しいと感じており、この記事を読まれた皆様にはお客様への周知のご協力をお願いしたいと思います。そして、ぜひ会場に足を運び、本が好きな方々と交流していただきたいと思います。

第3回浜藤古本市は2019年3月を予定しております。皆様のご出店、ご来場を心よりお待ちしております。



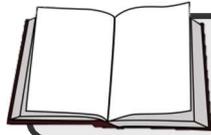
(もりおか町家物語館指定管理者
特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
三上 夏苗)

もりおか町家物語館が開催しているイベントは、下記サイトからご確認いただけます。

<http://machiya.iwate-arts.jp/>

レファレンスコーナー

県立図書館に寄せられたレファレンスの事例を紹介します。



Q. 稚児行列に参列する子どもの化粧について、額の点の意味や由来を知りたい。

美容師の方からの質問です。華やかに着飾った子どもたちがにぎやかに参拝するお稚児さん参り。その化粧の時、額の点について尋ねられることがあるので、由来や意味を是非知りたいとのことでした。

【回答】

民俗関係資料によると、子どもの額に点をつける風習は東北地方をはじめ広く各地で行われており、お宮参りや初めて外出する時に額に印を付けるところなど、お祭り以外でも見られます。地域や家によっても相違があり、「八」や「犬」の文字、「×印」を書く場合もあるようです。

この風習は『日本大百科全書 1』によると、「アヤツコ」「ヤスコ」等と呼ばれ、江戸時代にはすでに行われていたそうです。『日本民俗大辞典 上』では、子どもの成長を祝い健やかに成育するよという意味を込めた習俗とされています。また、『日本民俗事典』や『日本の神仏の辞典』では、魔よけのためのまじないとしています。

美しく着飾って化粧をした稚児は神聖な存在で、『祭・芸能・行事大辞典 下』では、稚児は神霊が憑依する「ヨリマシ」となると考えられていると記述されています。

何気なく見ている季節の行事にこのような由来があることがわかると、お祭りを更に楽しむことができそうですね。

キーワード：化粧 稚児 祭り

【調査プロセス】

1. 化粧関係資料をブラウジングしたが、記述を確認できなかった。
2. 民俗・風習や年中行事、神道関連資料を確認。
3. 百科事典でも「アヤツコ」について確認。
4. レファレンス協同データベースを確認。

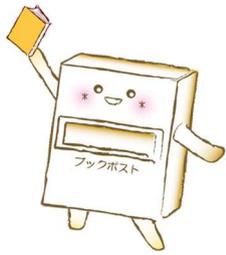
【参考文献】（ ）内は当館請求記号

1. 『日本大百科全書 1』 小学館 1984 (R/031/ニ 10/1-1)
2. 『日本の神仏の辞典』 大修館書店 2001 (R/162.1 /ニホ)
3. 『日本民俗事典』 弘文堂 1978 (R/380.3/オ 2/1 イ)
4. 『日本民俗大辞典 上』 吉川弘文館 1999 (R/380.33/ニホ/1)
5. 『日本を知る事典』 社会思想社 1980 (R/382.1/ニ 8/1)
6. 『祭・芸能・行事大辞典 下』 朝倉書店 2009 (R/386.1/マツ/2)
7. 『神事の基礎知識』 藤井 正雄 || 編著 講談社 2001 (176 /フジ)
8. レファレンス協同データベース 『稚児行列に参列する子どもの化粧の仕方を知りたい』



※このレファレンスの詳細は「レファレンス協同データベース」で公開しています。是非ご覧ください。

「レファレンス協同データベース」 <http://crd.ndl.go.jp/reference/>



児童わかば通信



やってみよう!

ミニ・ビブリオバトル

「ビブリオバトル」をご存知ですか? 「知的書評合戦」とも呼ばれ、ゲーム感覚を取り入れた新しいスタイルの「書評合戦」です。県立図書館ではこどもの読書週間に合わせ、今年4月30日にビブリオバトルを開催。本番に先駆け「ビブリオバトルってどんなことをするの?」というお友達のために、4月の毎週日曜日に「やってみよう!ミニ・ビブリオバトル」を開催しました。スタッフは発表者(バトラー)として、子どもたちは観覧者(オーディエンス)として参加してもらいました。もちろん、オーディエンスではなくバトラーとして参加してくれた子どもたちもたくさんいましたよ。



ビブリオバトルの発表時間は5分間だけど、ミニ・ビブリオバトルの発表時間は3分間なんだよ!



まず、発表者は自分が読んだことのある本の中から、紹介したい本を持ち寄ります。



私が、今日紹介する本は…

発表者は順番に本の紹介をします。



そうですね、印象に残っているのは…

一番印象に残っているのはなんですか?

発表が終わったら、発表した内容について3分間のディスカッションタイム。発表された内容でもっと知りたいことなど質問が飛び交いました。

全員の発表とディスカッションが終わったら、どの本が読みたくなったかバトラー、オーディエンス全員で投票します。

紹介された本は児童コーナーに展示しました。



そして…投票の結果、チャンプ本が決定!



チャンプ本には冠がつけられるのじゃ





岩手県内図書館紹介

岩手県内各地の図書館を紹介いたします！



図書館名	大槌町立図書館		
所在地	〒028-1117 岩手県上閉伊郡大槌町末広町1番15号 大槌町文化交流センター 3F TEL 0193-42-7226 / FAX 0193-27-5183 http://www.town.otsuchi.iwate.jp/gyosei/docs/2018030500016/		
施設の概況と利用状況	開館		
	延べ床面積		2216.99㎡ (うち図書館部分 413.17㎡)
	構造		木造、地上3階建 (図書館は3階部分)
	蔵書数		65,456冊 (平成30年3月末時点)
	登録者数		1,506人 (平成30年3月末時点)
	利用者数		2,476人 ※平成29年12月2日城山図書室閉室時点 [平成29年度数値]
図書館の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・町の中心部に立つ複合施設を構成する一部門として開館。大槌町および岩手県産材の木材を使用した純木造の3階建てで3階部分が図書館という、現時点(2018年9月)では日本初となる建物です。今後起こり得る災害や水害等に備え、資料が守られる場所として最上階の3階へ図書館が設置されました。 ・「災害復旧」ということから、延床面積は413.17㎡と、被災した図書館の面積と同規模となっています。小さな図書館ですが最上階は柱の無い空間となっており、圧迫感が軽減されています。大きな窓から入る日差しと木の香りが漂うぬくもりのある環境となっています。 ・仮設図書室の時から継続して収集している、郷土資料や東日本大震災資料をコーナーとして別置配架し、複合施設2階の震災伝承展示室と併せて震災の記録を知ることができます。 		
主な事業など	○季節や話題に応じた展示 / ○ブックスタート ○読み聞かせ会 毎月第3土曜日開催 / ○ペーパークラフト教室 毎月第1土曜日開催		
開館にあたって	<p>東日本大震災津波により被災した図書館の再建が、平成30年6月に果たされました。</p> <p>図書館再建までは、仮設図書室として「城山図書室」を開館し町民へサービスを行ってきましたが、復興工事で大型車両が行き交い常に変化する道路状況もあり、「誰でも気軽に立ち寄れる図書室」とは言い難かったように感じます。新館開館準備のために平成29年12月に城山図書室を閉室。6年間の来館者数は城山図書室1万7720人、移動図書館7465人の合計2万5185人でした。</p> <p>図書館開館後は、近隣市町村からも利用者が訪れ、乳幼児を連れた家族やこれまで少なかった中高生の利用も増加しています。また、複合施設として震災伝承展示室もあることから、観光目的で訪れる方の姿もうかがえます。一日の平均来館者数は、仮設図書室開館時より最大で約17倍に増えており、開館から約2カ月で来館者数がのべ1万人を超えました。</p> <p>小さな町の小さな図書館ですが、新しく開館した図書館への興味関心、期待の高さを実感しています。今後とも利用者の期待に応えるべく、誰もが利用しやすく、親しみある町民の居場所となるよう努力していきたいと思っております。</p>		

猫ノ図書館

ねこ館長むぎの出勤レポート

奥州市立胆沢図書館に勤務する「ねこ館長」の“むぎ”。新聞でもその仕事ぶりがたびたび取り上げられ、猫好きの図書館員たちをメロメロにしています。今回は、胆沢図書館に行かなければ見られない館長のお仕事ぶりを特別に寄稿していただきました！

2018.7.14 (土)



まずは、ヒト館長へご挨拶

猫本コーナー「猫ノ図書館」では、7/14から9/2にかけ、夏のスペシャルイベント“辰巳出版創業50周年記念&新刊発売記念「岩合光昭『ネコおやぶん』パネル展”を開催しました。7/14は開催初日ということで、ねこ館長「むぎ」がイベントを盛り上げるためと自身もパネル展を見るため、午後1時30分頃来館しました。

挨拶終了後は、いつもの定位置でくつろぎます。



取材も無事終わり、館内を巡回し、書架でひと休み

「フー、なかなかねこ館長もラクじゃニヤい。」

しばし、くつろぎ、利用者さんと触れ合ったり、ファンサービスをした後は、地元新聞社による取材にも対応します。

地元新聞社取材対応中の様子。

記者「むぎ館長、目線こちらをお願いします。」
むぎ「・・・こんニヤ感じ?? (緊張するし)」



ボクもこんニヤ風に「ネコおやぶん」みたくなれるかニヤ〜?



おまけ★

むぎ館長は、岩合さんのパネルを館長席からじっと見つめていました。

2018.8.19 (日)

午前 10 時 30 分頃、胆沢図書館 猫本コーナー「猫ノ図書館」のねこ館長 むぎが出勤してくれました。



①

館長の役割のひとつ、「館内の巡回」をしようかニャ?



②

フムフム…本が倒れていたり、ゴミが落ちてニャいかな?

(利用者に見守られながら黙々仕事をこなす、むぎ館長。)



③

今度は上へのぼろうかニャ??



④

しばしの撮影&ふれあいタイムをこなす、むぎ館長。



⑤

ねえねえ、ちょっと休憩したいんだけどー…

休憩中の様子を撮影しようとする…
むぎ館長「ちょっと今休憩中ニャンだけど(ギロンチョ)。」
(館長、ゴメンナサイ。)



⑥



⑦

ママに励まされ、再び館長職をこなそうとする、むぎ館長。



⑧

中学生の女の子たちに「カワイイ〜♪」となでられまくる、むぎ館長。
むぎ館長「…。」



ひょっこりにゃん!

むぎ館長の出勤レポートは、奥州市の facebook アカウトに掲載されています。ねこ館長の活動の様子をぜひのぞいてみてください。

<https://www.facebook.com/oshucity/>



ねこ館長秘書 & 図書館職員「おまけ」のショット!!

たくさんの子とふれあうなら、「カワイイ〜♪」となでられたい時間、あひタイム中のご様子。

編集後記

はじめに、今回の特集記事「つながる ～本にまつわる様々な取り組み～」に関して、お忙しい中ご寄稿いただいた各代表の皆様、図書館様へ御礼申し上げます。おかげさまで無事、第 183 号を発行することができました。

今回の記事で採り上げた場所以外にも、各地の地域文庫をはじめとして、県内には地域に根差しユニークな活動をされているところが数多くございます。今回は「読書」以外の場ともなっているところを中心に特集させていただきましたが、この他の団体等につきましても、号を改めて紹介させていただきたいと考えております。

図書館だけをとっていても、広い岩手県で各館が様々な活動を行っています。一部は新聞やニュースなどのメディアを通じて拝見することができますが、すべての活動を網羅し取材することはなかなか難しいと痛感します。

各館で活躍されている図書館職員の方のリレートークなども検討しているところです。県内の図書館職員が一堂に会する機会が希少なため、紙上での情報交流ができたと思います。

[編集担当:岩手県立図書館 企画広報課]



岩手県立図書館報

としよかん いわて

No. 183

発行日 平成 30 年 11 月 5 日

編集・発行 岩手県立図書館